

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

協会創立十六年と展示館開館 十三年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 三宅泰雄

本協会が財団法人として設立されたのは、一九七三年、はじめは「第五福竜丸保存平和協会」と呼ばれました。展示館は、一九七六年六月十日に開館のはこびとなりました。今年で、協会創立と展示館開館から、それぞれ、十六年と十三年を経ました。毎年六月、皆様にお集まり頂いていますのも、開館の六月を記念するためです。会場も毎年松本楼としていますが、ここが協会・展示館の誕生に、ゆかりの深い場所だからです。協会と展示館の生みの親は、当時、ごみ捨て場「夢の島」に捨てられていた第五福竜丸を発見し、破壊から救って下さった多くの方々ですが、実行に移したのは、美濃部都知事でした。

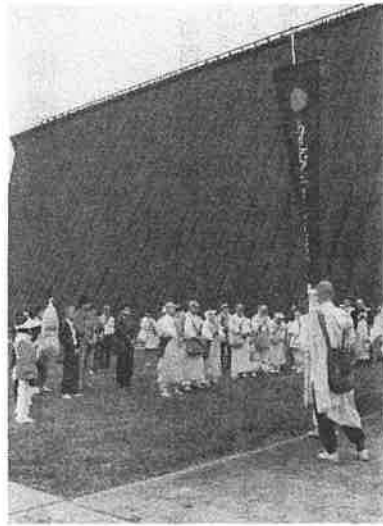
「第五福竜丸を保存しよう」という世論にこたえるため、美濃部さんを中心として、はじめての話し合いが行なわれたのが、ここ松本楼でした。その結論として「被爆の証人、第五福竜丸保存の訴え」を公表し、ついで「第五福竜丸保存委員会」を発足させました。いまから、二十年前の一九六九年四月のことでした。「訴え」の最後は、核兵器災害を経験し、戦争放棄の憲法をもつ我が国は「自らの義務を果たすことによって、日本国民の未来を切り拓くことができる。——私たちがそう信じて『被爆の証人』第五福竜丸の保存を訴えるものです」と結ばれています。代表委員は美濃部亮吉、中野好夫、畑中政春、松山義夫、森滝市郎、壬生照順、鈴木正久の諸先生と私の八人でした。このうち森滝先生と私をのぞく他の方々は、すべて亡くなりました。悲しいことに昨年は副会長長の松山先生も逝かれました。美濃部さんの好意により、その翌年から、東京都庁内に「保存委員会」の事務所ができ、専務理事の広田重道さんが常駐、展示館の



建設に関する交渉にあたりました。こうして実現したのが、現在の展示館です。当時は「夢の島公園」とは名ばかりで、交通の便が乏しく、残ったゴミで悪臭紛紛、路は泥だらけ、という惨めな有様でした。それでも、最初の一年間に二万八千人の人達が、展示館を訪れて下さり、私たちもホッとしました。今、「夢の島公園」は緑ゆたかな、美しい大公園となり、近くに熱帯植物館も完成しました。当方の来館者数も急増し、来館者総数も百万人をこえました。しかし、開館以来十三年たちましたので、館の内外に故障がはじまりました。幸い、先年、船の修理は完了しましたが、来館者が増し、展示品も整ってきましたので、これに対応して、展示館の再充実をはかるべき時期にきています。これらの宿題解決のため、専門家の意見を徴し、都当局にお願いしたいと考えています。

修学旅行五十校、五月に四万人の来館者

風薫る五月、修学旅行で来館した中学校は五十校。和歌山県から三九校、京都五校はじめ、岩手、宮城、愛知、滋賀、三重の各県からでした。それぞれ事前の学習がすすめられていることが感じられ熱心です。男子一名女子七名とわずか八名の和歌山県大塔村立富里中学校三年生は、「作文集、祖父の記録から」を通して」と担任の先生が達筆をふるった全員の学習記録を折鶴とともに寄贈され、郷里の船と、対面しました。宮城県の富岡中学校は、今年も校内で育てているスズランの苗を持参し久保山記念碑前に植えました。滋賀県の愛甲中学校は、早朝、江東



夢の島から広島へ

5月13日 二万人近く、五月全体では四万三千名、八一団体と従来の記録を更新しました。
展示館前から平和行進—
広島への火のりレーも
五月十三日、三つの平和行進が第



記念碑横にスズランを植える中学生

五福竜丸展示館前を出発、夏の広島にむかいました。沖繩近海に沈没した水爆の同型模擬爆弾を先頭に力強いシュプレヒコールを響か

録音テープ「被爆を語る」

杉並区在住の伊藤明彦さんから展示館に録音テープ「被爆を語る」(十四巻)が寄贈されました。伊藤さんが一九七〇年代に八年余かけて各地の被爆者千人余を訪ね聞き取り録音をした原テープ(オーブンリール九五〇巻)のうち十四人分について編集し、説明小冊子をつけたもの。六巻目は「ビキニに被災して」と第五福竜丸漁労

長見崎吉男さんの証言が二時間収録されています。

「この録音を通じてみなさんに聴きとっていただきたいのは、被爆の惨禍を否定しかえすことを通じて彼らが示した人間としての豊かさで力強さです」という伊藤さんは、若い世代に、広島・長崎・ビキニの実相と被爆者の真情が伝えられることを希望し、二百組を全国の公立・大学図書館に寄贈されました。

せた日本原水協をはじめとする国民平和行進、風船にいろとりどりのスカーフを風になびかせはなやかな集会の生協を中心とした市民団体の行進、久保山愛吉さんの記念碑に読経合掌し、深く頭を垂れ、うちわ太鼓を展示館いっばいに轟かせて出発した日本山妙法寺の平和行進でした。また、五月二〇日には、群集の渦の青年たちが展示館前で被爆者連帯集会を持ち、六月三日には、日本青年学生平和友好実行委員会による反核平和の火の東京リレー(五月二十五日横田基地出発)の第五福竜丸集結集会が持たれました。集会では本多副会長が挨拶しました。

第四三回国連総会は、一九八八年十二月六日、「科学と平和(サイエンス・アンド・ピース)」と題する決議を採択した。これは、一九八五年十月二四日の、国際平和年を宣言した総会決議、および、一九八七年十月二八日の、国際平和年の成果に関する総会決議、につづくものである。

今回の決議は、国際平和・国際安全保障・国際協力、人類の社会経済的発展、人権の尊重、環境保護にとつて科学が重要な役割をはたしうることについて、世界の科学者がいっそう自覚し、科学の発展と、それが現在および将来の文明と文化にたいしてもつ意味について、科学者相互の間で、また政治指導者との間で、さらにひろく公衆との間で、自由でオープンな対話をもつことが必要であるとのべている。

決議は、軍備競争によって、本来、人類が直面している急を要する諸問題の解決に用いられるべき科学者の才能と財源の相当な部分が、軍備に関連した研究・開発部門に

国連総会の「科学と平和」の決議

川崎 昭一郎

向けられている事実を指摘している。決議は、一九八六年から毎十一月に、日本の科学者も積極的に参加してすすめられてきた、「科学者による国際平和週間」のキャンペーンについて言及し、これを科学者の共同した努力として高く評価し、つぎの四項目で結んでいる。

一、国連総会は、毎年十一月十一日を含む一週間を「科学と平和の国際週間」と宣言することを決定する。

二、国連総会は、国連加盟国および政府間組織・非政府組織(NGO)にたいして、大学、その他の高等研究機関、科学アカデミーと研究所、科学界の職能団体および個々の科学者が、上記週間内に、科学・技術の進歩と平和・安全の維持との間のつながりについての研究と情報普及に役立つ、講演会、セミナー、討論会、その他の活動を行なうよう促すことを勧告する。

三、国連総会は、加盟国にたいし、専門家と情報の交換を円滑にすることによって科学者の国際協

協合理事会ひらく

評議員・顧問を選任

五月二十二日、東京・学士会館で協会の第八八回理事会が開かれ、一九八八年度の事業報告、同決算を決定しました。年間の来館者が急増するなかで、展示館の管理・運営の業務を完遂したことが報告され、小さい規模でも順調な決算であることが了承されました。

また、評議員・顧問の選任を行い、新しく小佐田哲男(元東大教授)、柴田徳衛(東京経済大学教授)両氏を評議員に選出するとともに、全員を再任しました。

当面の活動計画では、展示館の修理・拡充について、専門家による提言、報告書の作製を急ぎ、東

鈴木隆氏、元第五福竜丸乗組員鈴木隆氏(東京都渋谷区)が四月二十九日亡くなりました。五九歳。

京都へ要請を行っていくこと、展示替の計画とともに展示内容の一層の充実と努めることなどを決定しました。

選出された評議員・顧問の氏名はつぎのとおり(敬称略)。

●評議員(18名) 秋月辰一郎、伊東壮、内山尚三、大石又七、小笠原英三郎、落合巖、小野周、小佐田哲男、柴田徳衛、庄野直美、関屋綾子、畑敏雄、藤原弘、三井周、森一久、山川新二郎、山口勇子、吉田嘉清。

●顧問(5名) 石井あや子、草野信男、古在由重、福島要一、森滝市郎。

●お詫び 前号巻頭言に誤植がありました。(が正)

中段最終行 原水爆禁止運動
下段右5行 一瞬の間でしかない
左6行 動機で動機で
左3行 ようすか
また七面の三段目ところ栗浜は
久里浜の誤まりでした。



最近、岩波書店から、吉野源三郎さん(一九九一-一九八一)の遺著が「新書」として出版されました。題して「職業としての編集者」。その一冊を智重子夫人から頂戴しました。



(1977年8月1日 朝日新聞。中央 吉野氏、左 三宅。)

二つに分れ、互いに犬猿の仲であった原水協と原水禁に融和をよびかけたことは、前にも書きました。その頃、吉野さんは、すでに「世界」の編集長を十数年前に引退し、もっぱら後見役で、お年もすでに七十八才の高齢でした。「新書」では現役時代の文章が主となつていますので、この件の叙述は見当たりませんでした。

高齢で、しかも持病の肺気腫症になやんでいた吉野さんが、原水禁運動の統一に、なぜあれほど熱心になられたのでしょうか。

吉野さんは東大哲学科の出身でしたが、卒業とともに、志願兵として陸軍に入隊しました。ところが一九三一年に治安維持法にふれたとされ、一年半もの長い間、陸軍刑務所に拘留されました。

たぶん、吉野さんは、平和主義の立場から、当時の軍国主義の横暴に、批判的だったのでしょう。戦後「世界」の編集長になってからも、平和問題談話会をつくったり、世界の平和問題に、とくに力を入れてきました。

一九五四年、第五福竜丸ビキニ被災事件を契機として、原水禁運動が盛り上がりました。吉野さんは、この運動の顧問等としておられたようですが、とくに運動の中

心的な存在ではなかったようです。前にも書きましたが、一九七七年に、被爆問題に関する大規模な国際会議が日本で開かれることになりました。このとき、原水禁運動の分裂状態を憂え、少なくともこの国際会議には、超党派の立場で参加するよう勧告したのが、吉野さんを主軸とする前記五人のよびかけでした。

その二年前の一九七五年に、被爆三十年国際フォーラムが広島で開かれました。そのときの外国からの出席者の中に、ロバート・オルドリッジ(当時五十一才)という人がいました。

この人はロッキード社で十六年間も、ポラリス型やポセイドン型の核ミサイルの開発にあたっていたエンジニアでした。そのうち彼は社から、トライデント潜水艦の設計を命じられました。これには、数百発以上の原爆が搭載されるのでした。

オルドリッジは、このような恐ろしい兵器までも開発することに大きい疑問を抱き、散々、苦慮を重ね、その去就に迷いました。しかし、妻と十人の子供の大家族を養うには、どうしたものかと、家族全員に相談しました。そのとき、

大学生であった長女が、父に向って決然として、「お父さんは、良心に従って、忠実に生きて下さい」といいました。娘のこの一言で、彼は退職を決意しました。

フォーラムの顧問として本人からくわしく聞いた吉野さんは、核兵器開発のテンポがあまりにも早いことに驚き、自分でも核兵器の現状をくわしく調べました。その結論として、被爆国民として、人類に対する責任の重大さ、原水禁運動の分裂に対する疑念と憂慮の念から、意を決して、よびかけ(広島・長崎アピール)の主唱者となったのでした。このよびかけに対し、打てば響くかのように、数千人以上にもなる知名人からの、圧倒的な支持が寄せられました。この状況を背景として、原水協、原水禁は一応の合意に達し、国際会議への出席、ついで世界大会の開催にまでこぎつきました。

吉野さんのアダ名は「世界情勢憂慮居士」だったようですが、まさにそのアダ名の通りの行動でした。

原水協、原水禁は、数年前に再び分裂してしまいました。いまは亡き「憂慮居士」の吉野さんは、この有様をどうご覧になっていることでしょうか。